研究課題　中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史的変遷の研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　天野眞志（国立歴史民俗博物館・特任准教授）

　所内共同研究者　尾上陽介・山田太造・渋谷綾子・高島晶彦

　所外共同研究者　小倉慈司（国立歴史民俗博物館・准教授）・富田正弘（富山大学・名誉教授）・野村朋弘（京都造形芸術大学・准教授）・柳原敏昭（東北大学・教授）・名和知彦（陽明文庫・事務長）・貫井裕恵（金沢文庫・学芸員）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、古文書研究の総合的な進展を目指し、古文書料紙に含まれる繊維や添加物等の構成物や抄紙過程で付与される諸情報に注目し、考古学や植物学などの成果や手法を踏まえた総合的な料紙分析をおこなう。  
　具体的な方法としては、光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いて料紙を非破壊的に調査し、繊維および添加物の状態を分析する。特に、史料編纂所所蔵「島津家文書」、陽明文庫所蔵文書、松尾大社所蔵文書、東北大学保管「結城白河家文書」、米沢市上杉博物館所蔵「上杉家文書」を調査し、古文書料紙に含まれる繊維や添加物など構成物を、種類・量・密度の解析をおこなう。さらに、糸目や簀目、皺などの抄紙過程で付与される表面情報を踏まえた多面的な分析から古文書料紙の基礎情報を蓄積することで、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特質や歴史的変遷について科学的検証に基づく検討をおこなう。

（２）研究の成果

　新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初予定していた調査・研究活動が制限されたが、共同研究者間で検討を重ねて統一化した古文書料紙分析のためのデータ項目と顕微鏡観察・撮影手法により、松尾大社所蔵史料、金沢文庫文書、仁和寺所蔵史料を対象とした古文書料紙の顕微鏡撮影を行った。  
　松尾大社所蔵史料では南北朝期以降の文書料紙を顕微鏡撮影するとともに、明治初年の太政官・神祇官発給文書も撮影を行い、中近世古文書料紙との比較に向けたサンプル調査を行った。金沢文庫では、聖天・倉栖兼雄書状等7件の文書料紙について撮影して料紙の表裏における混入物の差を確認した。  
　研究成果として『東京大学史料編纂所研究紀要』に論文が掲載された。さらに2021年3月にAnnual Conference of Association for Asian Studies 2021（AAS20201）にて研究発表を行って本研究の調査成果を含むデータ共有基盤のあり方について議論した。